

No.31

博物館だより

平成19年(2007年)度 実験展示

「さわる 五感の挑戦 PARTII」

平成19年9月15日(土) ~ 10月14日(日)



びんざさら

現代社会は、テレビやラジオ、インターネットなど様々な媒体を通じて映像や音声が行き渡り、またおびただしい数の本や雑誌が次々と出版されています。私たちはまさに情報化社会を生きています。こうした情報をうまく選択し活用すれば、より多くの知識を得ることができ、物事の見方や世界観を豊かにしてくれることでしょう。しかし、画像や活字の情報だけでなく、自分自身の身体を通じた知覚とそれによって得られる情報を見直してみることも大切ではないでしょうか。

当館の実験展示は、五感を積極的に活用して資料を鑑賞しようというもので、郷土玩具、和楽器、仏像レプリカの3つのコーナーを設けています。目で「見」、手で「触れ」、耳で「聞き」、鼻で「嗅ぐ」、身体感覚を研ぎ澄ませ、実際に資料を感じ取ることで、資料のもつ性質や機能をより豊かに体感していただけることと思います。画像や音声、活字など受動的に得られる情報は一律ですが、身体感覚で得られる情報の質や深さは、それぞれの感性や関心の方向性により十人十色といえるでしょう。また、一人でゆっくりと鑑賞する場合と、何人かでコミュニケーションをとりながら鑑賞する場合でも、感じ方や楽しみ方は変わってくるでしょう。この展示を通じて、五感の豊かな可能性を感じていただければと思っております。(滝沢幸恵)

広瀬浩二郎 五感を拓くワークショップを語る

広瀬浩二郎氏（国立民族学博物館 民族文化研究部 助教）は、日本宗教史、障害者文化論を専門とするフィールドワーカー。当館の実験展示では、アドバイザーという形で協力していただいています。今回は、「五感を拓くワークショップ」をテーマに語っていただきました。

— 昨年の民博の「さわる文字、さわる世界」展のワークショップは、どんなものだったのですか。

広瀬：展示物の中でも大人気だった野鳥彫刻の作者、内山さんの指導でバードカービングを作りました。展示会場の入口に置いた神社の模型の作者、大工の清水さんには、道具の説明と木の話をしてもらいました。万博公園の植物をさわる体験会も開きました。また、MMP（みんなくミュージアムパートナーズ）と協力して、一般の来館者を対象に「点字で名前を書く」ワークショップをやりました。これはたいへん好評で、現在も毎月行なっています。

— 一連のワークショップの狙いは何だったのでしょうか。

広瀬：昨年の企画展では「さわる」ことにこだわっていました。内山さん、清水さんのような職人の仕事は、手の感覚、触覚を駆使して、作品を仕上げていきます。自然観察とは目で見るだけでなく、じつは視覚以外の情報も多い。木に触れ、時にはちょっと木の皮を剥いてみたり、匂いを嗅いだり、実を食べたり。五感、とくに触覚の力に気づけば、観察の幅が広がります。

視覚以外の感覚をもっと活用してみるとおもしろいし、新たな発見がある。視覚障害者に楽しんでもらうこともワークショップの狙いでしたが、五感に対する気づきという面では、目の見えている人たちへのメッセージの意味合いが強いですね。



「さわる文字 さわる世界」展で

— 参加者の反応はいかがでしたか。

広瀬：僕のワークショップは「チカラ」をキーワードにしています。チェック、カオス、ライフの頭文字を取ってチカラ。たとえば目の見えている人の自然観察では、日常的にはあまり意識していない触覚をはじめ他の感覚を使う楽しさに気づく。ここで、まずチェックが働く。普段の生活では視覚に依存するのが常識ですが、それをあらためてチェックする。人間には視覚以外に感覚が四つもあるんだよな、それらを自分は十分利用してきたのかな……。チェックにより常識が揺さぶられるわけです。

次にくるのがカオスです。さわるとユニークな発見がたくさんあります。温度、質感はその代表ですが、木のざらざら感やすべすべ感、やはりさわって初めてわかることですね。視覚だけでは得られなかった意外な事実。こういう世界があったのか、こういう感覚もあったのかという驚きが続くと、いい意味でのカオス、つまり混乱状態になります。

— 常識が覆されるわけですね。

広瀬：カオスは何かが生まれる前兆、前向きな混乱なのですが、ワークショップが単発で終了すると、カオスのままでストップしてしまいます。ライフというのは人間の生き方、すなわち人生観、世界観です。視覚を中心に生きてきた人からすると、目の見えない人はいわゆる障害者、かわいそうな人ということになると思いま

す。でも逆に、他の四感の潜在力を引き出しているプラスもある。さわることの魅力を熟知しているのが目の見えない人たちなのです。そのような新たな気づきにより、ものの見方、考え方が変わる。これがライフなんですね。

チェック、カオス、ライフというプロセスの完成が僕のワークショップの理想です。参加者にライフを共有してもらうためには、ワークショップを繰り返し行なわなければなりません。継続は力（チカラ）なり、です。去年の企画展は好評でしたし、『だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム』（読書工房）という本もまとめることができ、達成感がありました。しかしワークショップに関しては、まだスタートラインに立ったばかりだと思っています。

— 最近の博物館の傾向としては、ワークショップをはじめ参加体験型の事業が増えています。吹田市立博物館では歴史学習を意識しているのですが、歴史学習の観点でのワークショップはいかがですか。

広瀬：博物館でワークショップ、体験学習が増えている背景には、インターネットなどで、簡単かつ大量に情報が入手できる現代社会の「便利さ」があるのではないのでしょうか。歴史の勉強をしようと思えば、自宅にいながら知識を得ることができる。それでも博物館にわざわざ行くとしたら、その利点は何なのか。この問いに対する一つの答えが、五感に訴えるワークショップなのです。

たとえば、さわることは、その場に行かないとできません。そんな現地の強みを活かすのがワークショップであり、現地は参加者に生きる力（チカラ）を与える学びの場となるはずです。多種多様な展示品を集めた博物館、あるいは万博公園のような館外の自然が学習の場となるのは、五感の刺激という点で、たいへん有意義なことです。

僕のように民俗学や人類学を専攻する者は、フィールドワークという手法で、現地に行くことを重視しています。現地の人のお話をじっくり聞く、また食べることも含めて、現地の文化を味

わう。これまでの研究活動を通じて、僕は現地に行く必要性、重要性を強く感じています。研究者と一般の人を分けるつもりはありませんが、僕たちが日々取り組んでいるフィールドワークの楽しさ、大切さをどこまで伝えることができるのか。実際に古代や中世の社会にタイムスリップすることはできないのだから、歴史学習には現地を体験できるような工夫が不可欠ですね。

— 今後、どんなワークショップを考えていますか。
広瀬：テーマとしては「五感を拓く」ということです。やはり僕の特徴、原点は「見えない」ことにあります。世の中には目の見えない人がたくさんいて、中途失明者、それも高齢になって視力を失った方にとっては、これまで頼ってきた視覚が使えなくなることは、しんどく辛い「障害」です。そこで、どうしても視覚を使えないというマイナスを数え上げがちになります。しかし、マイナスばかり考えていたら人生はつまらない。積極的なライフを創るためには、いい意味で開き直る。視覚を使えないのではなく、視覚を使わないおもしろさみたいなものを掘り出してみる。他の四感、そして第六感のパワーをフル活用すること。これが僕のライフの趣旨であり、従来の障害者イメージを変えていければいいなと思います。

10月8日の吹田市立博物館での「^{やみなべ}闇鍋」ワークショップでも、視覚を使わない楽しさやユニークな五感活用術を伝える仕掛けをあれこれ考えています。アイマスクをして視覚を使わない状況で、いろんな物にさわってもらうつもりです。僕が実感している視覚を使わない楽しさ、視覚障害という異文化（現地）の雰囲気はどこまで伝えることができるのか。参加者同士でペアになってもらい、軽く身体を動かしたり意見交換をしたりしながら、わいわいがやがやと進めていければいいかなと思っています。

— 楽しいワークショップになりそうですね。どうもありがとうございました。

（インタビューア：滝沢幸恵）

手当て—東洋医学における触れること—

十四世鍼医師 藤本蓮風

少し前までは「手当て」という言葉はよく聞かれ、人々は当たり前のように知っていた。医者が医療行為をすることだということ。

幼い子がむずかかったり、発熱すると母親は子を抱きしめたり、額に手を当て異状を何とか理解しようとする。対する母親の本能的「反射」、手当てだ。事実、これだけで苦痛が緩解^{かんかい}することが多い。原初的医療行為なのだ。

それは元々、毛づくろいに観られる動物行動の基本。あらゆる四足獣にみられる親愛の情を示す舌による接触（ぺろぺろ行為）、とりわけ犬の行動によくみられる。彼らの相互コミュニケーション形態の一つとみなすことができる。スキンシップと言えば分かりやすい。

素朴にして本来的な「生命の触れ合い」に淵源をもつ「東洋医学」はこれを「切診^{せつしん}」と銘打ち、確かなる位置づけをした。

本医学は、患者から得る情報を極めてシンプルだが本質的な「本能」「感覚」を中心にした収集「望」・・視覚、「聞」・・聴覚・嗅覚と進める。そうしてこれら感性的なものから次に、情報を「物語」に纏^{まと}めるべく、理性的なもの「問」・・東洋医学的問診、へと進める。

更により正確な情報とするため、「切」・・手当てによって確認する。つまり、視覚・聴覚と嗅覚・「問」と流れる患者へのアプローチは、最終段階で本来的な「本能」「感覚」に回帰すべく「切」に至る。

優しさの故に、敢えてダイレクトに肌へ触れることをできるだけ迂回し、遠くから近くへの接近法であり、同時に、生命にたいする究極の理解こそは「触れる」ことであつたと言えるのではないだろうか。そしてこれこそは、単に診る側の視線だけではなく診られる側の「癒し^{いやし}」を伴うものであつた。



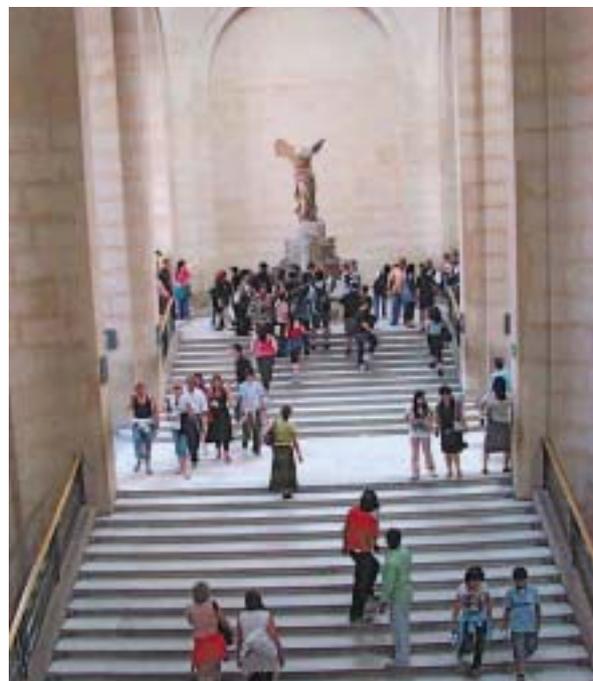
ルーブル美術館のさわる展示

館長 小山修三

ルーブル美術館のミロのヴィーナスや勝利の女神ニケ像のまわりはいつもいっぱいの人だかりだが、台の上にとっただけで特別な防御施設はない。ほかにも古代からの有名彫刻がずらりと並んでいるが、やはりボンと投げ出してある感じ。もちろん、観客のマナーもいい。

彫刻フロアの奥の一角に「さわる展示」の部室が特別につくられていた。展示品は残念ながらレプリカだが、精巧なもの。点字の説明も付けてあり、むしろ積極的にさわらせることを目的にしている。数年前オープンして大きな話題になったという。ちょうど、10人くらいの知的障害児グループが見学に来て。女の子がマリア像の顔をいとおしげにさすりつづけている。2人の係員の懇切な対応に、博物館行政の懐の深さを感じる。

誰にでも楽しめるユニバーサル展示を、という声はいまや博物館の課題となり、大きな波となって動きだしている。ニューヨークのメトロポリタン美術館では、本物の作品に触



れることができる場所があるし、コンピューターを駆使して音や光の効果をねらう展示をしている博物館もある。ガラスケースにモノをとじこめた展示は、視覚だけしか考えていないのではないか、さまざまな感覚をつかって楽しむことこそ、本来の姿であると言ったこの企画のアドバイザー役の広瀬さんの言葉が浮かんできた。



実験展示「吹田のアルバム」展

6月16日から7月29日まで、市民実行委員の協力を得て、「吹田のアルバム」展を行いました。

博物館が担当したコーナーは、まず「描かれた風景」。中世の荘園絵図や近世の開発絵図、市制発足当時の鳥瞰図などで構成しました。そして、「写真で見る景観」では、古い村の風景、川、橋、鉄道、千里ニュータウン、万博の写真を展示し、吹田市の近代における発展の様子をたどれるようにしました。吹田の景観の特徴は千里ニュータウンや万博を契機として大きく変わったことでしょう。

市民企画のコーナーは、第1期「千里ニュータウン」、第2期「吹田を歩く、撮る」、第3期「市民と万博」をテーマにした写真を展示しました。「千里ニュータウン」では奥居武氏、「吹田を歩く、撮る」は岡村昇二氏、松岡要三氏が担当しました。そして、「市民と万博」では、市民の皆さんから寄せられた



市民展示のコーナー

思い出の写真を展示しました。意外にも万博の写真が少なかったのは、カメラを今ほど手軽に使うような時代ではなかったためか、あるいは地元なのでつい油断して撮る機会を失ったのでしょうか。

見学後のアンケートでは「なつかしい」「吹田の歴史がよくわかった」などの意見が寄せられました。特に若い人には新鮮な驚きがあったようです。しかし、「もっと写真をふやしてほしい」、「昔の写真と現在の写真と比較してほしい」などの意見もありました。これらの寄せられた意見は、今後の企画の充実に役立てたいと思います。

気になる一枚

「吹田のアルバム」展では、沢山の市民の方々との協力を得ることができました。中でも吹田市山田東にお住まいの野口昭雄氏に多くの写真を提供していただきました。その中に、万博予定地の造成が進む中、ポツンと墓地がとり残されている写真があります。当時、土地を造成し開発していくことに、地域の大きな発展を期待した人も多かったのではないのでしょうか。しかし、ブルドーザーが墓地の周囲をならしていく様子は、その地で営まれてきたそれまでの生活や文化が失われていくことを象徴しているようにも見えます。 (池田直子)



造成が進む万博予定地 (1967年野口昭雄氏撮影)

写真に写し取られたニュータウン

「'07 EXPO'70」実行委員 奥居 武

モノを引き立てるのが博「物」館の展示。パネル展は退屈だ…を持論にしているはずの小山館長が、写真展をやってみたくて言う。僕はプロのカメラマンではないが、ニュータウン育ちとして乗りかかった船、お申し出に乗ってみることにした。

千里ニュータウンが開発された1960年代はスナップが一般家庭に急速に普及した時代だった。撮る対象にも事欠かなかった。ぴかぴかのニュータウン。万博。新しい町で築いた新しい家族には、いくら撮っても飽きない子供の姿が町じゅうにあった。

写真1は、1970年夏、万博の「象まつり」のためタイを旅立ち、神戸港から万博会場まで行進してきたゾウの群れを、ニュータウンの主婦、赤井さんが北千里駅前の藤白橋の上から撮ったものだ。長い間眠っていたこの写真をデジタル修復し、拡大、検証すると実に多くのことがわかってきた。影の向きから、時刻は昼過ぎ。観衆は女性と子供ばかりで、平日であったと推定できる。女性はほぼ全員スカートをはいている。男の子は野球帽をかぶっている。籐で編んだ買い物籠をさげているお母さんもいる。駅前交差点には歩行者用の信号機がすでについているが、クルマ用の信号機には、今は見られない緑と白のゼブラの背板がある。真冬の2月、同じ撮影位置に立ってみた。街路樹が大きく成長し、右奥の住宅街は葉が落ちた状態でも全く見えなくなっていた。1970年当時は真夏でも住宅街がよく見わたせる。手前の影はハッキリ見える天気なのに、箕面の山影は霞んで見えない。空気は今より汚れていたのだろうか。

今、大規模建替などによって、ニュータウン開発当時の記録は大量に失われる危機にある。それは日本で最初のニュータウンの輝かしい「生活記録」であり、普遍的な訴求力を持つのではないだろうか。写真2・3は、青山台の同じ場所の1965年と2007年。写真はただ過去を回顧するものではなく、過去から未来へのタイムマシンではないだろうか。



写真1



写真2



写真3

催し物のご案内

平成19年(2007年)度実験展示 「さわる 五感の挑戦 PARTⅡ」関連行事

講演会 & ワークショップ

10月8日(月・祝) 午後2時～4時

講演「フリーバリアの時代

—“点字力”で切り開く博物館の可能性—

暗闇体験ワークショップ

「闇鍋は人生の縮図なり!？」

国立民族学博物館民族文化研究部助教 広瀬浩二郎氏
博物館講座室 先着120名 申し込み不要 聴講無料

演奏会

10月14日(日) 午前10時30分～11時30分

和太鼓演奏会「心に響くふるさとの音」

演奏 郷土サークル野火

博物館3階横広場 申し込み不要 無料

歴史講座

9月15日(土) 午後2時～3時30分

「中世吹田の荘園—その支配と領民の活動—」

当館学芸員 池田直子

9月22日(土) 午後2時～3時30分

「神仏習合の絵画」

当館学芸員 滝沢幸恵

10月6日(土) 午後2時～3時30分

「タイルの考古学」

当館学芸員 藤原 学

博物館トーク

10月13日(土) 午後2時～3時

「琵琶法師の語り物—怪談「耳なし芳一」より—」

当館学芸員 滝沢幸恵

11月15日(木) 午後2時～3時

「大阪万博の推進運動」

当館学芸員 田口泰久

12月16日(日) 午後2時～3時

「摂津国ができるまで」

当館学芸員 高橋真希

歴史講座・博物館トークはいずれも申し込み不要

講座室 先着120名 聴講無料

旧中西家住宅見学会

10月13日(土)・10月27日(土)

いずれも午前10時～11時30分、午後1時～2時30分の2回
江戸後期の大庄屋屋敷である旧中西家(岸部中4-13-21)
の住宅と庭園の見学会をします。

定員 各回20名

往復はがきに参加者の住所、氏名、電話番号、希望日時
を書いて博物館まで。参加無料。

申込締切 10月13日分は9月21日(金)、10月27日分は
10月1日(月)必着。はがき1枚に2人まで。多数抽選。

次回展示予告

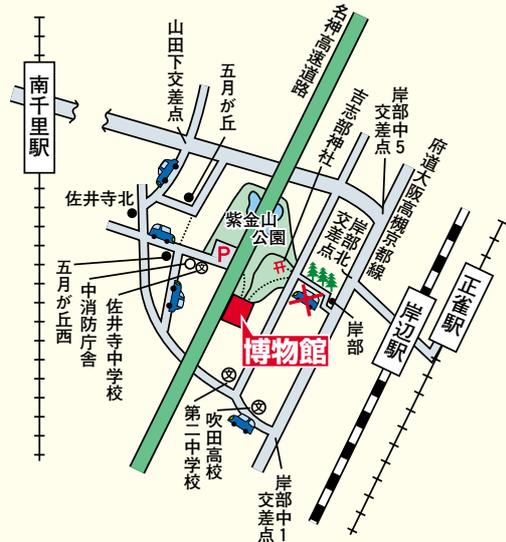
市民が創る展覧会!千里ニュータウン展に続く第2弾!
平成19年度秋季特別展

「'07EXPO'70～わたしと万博～」

10月20日(土)～12月2日(日)

37年前の千里丘陵へタイムスリップして、地元吹田市民ならではの万博の裏話や、舞台裏なども表現しながらの展覧会です。さまざまな人(いろいろな世代や体験・未体験も含めて)の大阪万博に対する思い・想い出などを「わたしと万博」として集合させ、1970年当時の千里の丘の熱気やサプライズを再現したいと思います。誰もが楽しめる展示やイベントが盛りだくさんです。

交通案内



●JR吹田駅・阪急千里線吹田駅から

桃山台駅ゆき・山田榎切山ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分

阪急山田ゆき・千里中央ゆきバス「岸部」下車徒歩10分

●JR吹田北口から

五月が丘南ゆきバス「五月が丘西」下車徒歩7分

●阪急千里線南千里駅から

JR吹田ゆきバス②③系統「佐井寺北」下車徒歩10分

●JR東海道本線岸辺駅下車徒歩25分

●車でのご来館は佐井寺北・五月が丘方面からお願いします。

●開館時間

午前9時30分～午後5時

●休館日

月曜日、祝日の翌日

12月29日～1月3日

<http://www.suita.ed.jp/hak/>

吹田市立博物館だより 第31号

平成19年(2007)8月31日発行

吹田市立博物館

〒564-0001

吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL.06 (6338) 5500

FAX.06 (6338) 9886